#16
他の誰でもない、世界でたった一人の彼
著：藍澤たすく イラスト：かもめ遊羽

駅前再開発の影響ですっかり寂れてしまった商店街の路地の奥。
小柄な学生服の少年を取り巻くのは明らかに不良と思しき柄の悪い連中だった。
「おとなしく金を出せって言ってんだよ、兄ちゃんよお」
「おいこらてめえ、シカトすんじゃねえよ、なめてんのか、おお？」
安い恐喝の文句をぶつけられた少年は、しかし眉一つ動かさず微動だにしない。
まるで彼の周りには誰一人存在していない、とでも言いたげな不遜な佇まいを見せている。
「ふん、そうかい。ちっと痛い目をみねーとわかんねーみたいだな」
「歯ぁ食いしばれや、おらあああああ!!」
「待ちな！」
不意に鋭い声がした。振り向くと赤い髪を風になびかせ、右目に眼帯をした少女の姿があった。眼帯の上下には生々しい傷跡が走っている。美しさと凄絶さを伴った容貌だった。
少女は獲物を狙う猛禽のような目つきで不良共を睨めつけている。
「あ、姐さん!?」
「そいつは【K】だよ」
「えっ、【K】って……まさかあの……」
少女が【K】という名前を口にした途端、不良連中に明らかな動揺が走った。
「判ったらとっとと失せな。【K】を目の前にして命があるなんて、お前らまったく悪運の強

い野郎どもだよ」
「へっ、何が【K】だよ！　こんなナヨナヨしたちび、俺が一発で！」
「バカ！　中藤、やめろ！」
仲間の制止を振り切って少年に飛びかかったリーゼントは、しかし突然意識を失いそのまま路上に昏倒してしまった。
見るとその鳩尾には眼帯少女が放った鋼鉄製のヨーヨーが深々とめり込んでいる。ヨーヨーは未だ高速で回転しており、化学繊維の焦げる嫌な臭いを辺りに漂わせていた。
口から泡を吹いて痙攣する中藤を、取り巻き連中はただただ恐怖に満ちた視線で見守っている。
ヨーヨーが静かに少女の手に戻った。
「失せろって言ったよな、あたしは……」
「ひえええええ！」
「す、すいません、姐さん！　こいつ新入りで何も判ってないんすよ！　あとでよく言い聞かせておきますからあああ！」
少女の一喝に、不良共は蜘蛛の子を散らすように逃げていった。
後に残ったのは【K】と眼帯の少女だけだ。
少女は少年の前に陣取り、仁王立ちする。人差し指の上でくるくるとヨーヨーを回す仕草も

手慣れたものだ。
「【K】、いつこの街に戻ってきたんだい？」
「……」
「ふん。言いたくなけりゃそれもいいさ。昔からそういう奴だったよね、あんたは」
「……」
少女の顔に一瞬懐かしむような笑顔が浮かんだ。
「でもあんたが戻ってきたってことは……【J】が動き出したんだね……？」
呟くようにそう言うと、少女は元の鋭い顔つきに戻る。
【K】と呼ばれた少年――白水圭一――は、少女と視線を合わせようともしなかった。
彼はこう考えていた。

（……この人、誰？　【K】って何？　……もしかして僕のこと？？）

そう、圭一は少女に全く見覚えがなかった。
これまで微動だにしなかったのも、単に怖くて足が竦んでいただけだし、いつ街に戻ったもなにも、圭一は生まれも育ちもこの街で、もう14年間も普通にここに住んでいる。
正直怖くてちびりそうなぐらいだったが、下手に受け答えしてヤブヘビになるのも嫌なので、

圭一としてとにかくは黙っているしか手がなかったのだ。
「今度はあたしを置いて一人で戦いに行くなんてごめんだぜ」
少女はふっと優しげな表情になって圭一の胸にその身を預けた。
外見とは裏腹に甘い香水のような匂いがふわりと漂ってくる。
（うわー、なにこれなにこれ、どうしよう……。早く人違いだって言わないと取り返しのつかないことになりそうなんだけど……でもそれを言ってさっきの人みたいにヨーヨーでボコられても怖いし……）
「震えてる……？　へえ、もしかしてあんた怯えてるのかい？　あんたほどの男でも怖いことがあるんだね……ふふふ、無理もない、なにしろ相手はあの【J】だもんな」
少女は顔をあげて愉快そうに笑った。
「あ、あの……」
「危ない！」
突然少女が圭一を突き飛ばす。
訳も分からずごろごろと路上を転がった圭一は顔を上げてはっとした。
自身の顔を守るように掲げられた少女の左腕に、真っ黒なダーツの矢が四本、一列に並んで突き刺さっていたからだ。
「ほお、私の攻撃を防ぐとは……さすがは堺茜……いや、今は【L】とお呼びすべきでしょ

うかな?」

ぼろぼろになった商店街のアーケードの上から、まるで骸骨のように痩せ細った男がこちらを見下ろしている。見る者すべてに嫌悪感を起こさせるような、いやらしく歪んだ笑みをその顔に貼り付けて。

男はそっと懐から新しいダーツを取り出した。

その骨ばった手が動くたびに金属が軋むような、耳障りで嫌な音が響く。

「【D】、貴様……寝返ったのか!?」

「これはこれは人聞きの悪い……わたくしは最初からただ自分の成すべき仕事をしているだけですよ。そう、貴方がたを抹殺する、という大事な仕事をね」

「くっ……」

少女が唇を噛む。その瞳に宿るのは明らかな憎悪の色。

「走れ、【K】！　ここはあたしが食い止める！　お前は早く【A】のところに行けええ！」

言うが早いか、少女の両腕は紅蓮の炎に包まれた。ダーツの矢は溶けて消え、その火炎が奔流となって骸骨男に襲いかかる。

爆発。大音響。断末魔。

それらをバックに圭一は無我夢中で走っていた。とにかく後ろを振り向かず、前へ前へ走ることだけを考えた。死にたくない……こんなところで死にたくないよ!!

どこをどう走ったのかも判らない。ずっと同じ所をぐるぐると回っていたような気もする。

圭一には見慣れたはずの街がまるで永遠の迷宮のように思えた。

「ケイ、こっちだよ！」

声と同時に圭一は腕を引っ張られ、商店街には場違いの黒塗りのリムジンの中に引き込まれた。

「やれやれ、坊っちゃんの我が儘にも困ったものですね」

ドアを閉めると同時に音もなく発車したリムジンの運転席には白髪の老紳士の姿があった。

「ほんとだよ！　少しは王位継承者としての自覚を持って欲しいな！　今回はケイ見つけるの、ほんとに大変だったんだから！」

「ご、ごめんなさい……」

圭一は自分の隣でぷりぷりと怒るツインテールの少女に、訳もわからず謝った。

少女は圭一を車に引き込んだままの姿勢でしっかりと腕に抱きついている。

「……んふふふ、ケイのお手て、お日様の匂いがする～」

「ちょっ、ちょっと!?」

ぴったりと密着してくる子リスのような少女に圭一は戸惑いを隠せなかった。

その様子を見ながら、老紳士はため息混じりに呟く。
「まったくお忍びで市井の者の生活を視察するというのもいいですが、御自身の身の安全というものをもう少し考えて頂かなくては困りますな。王子の体は王子だけの物ではないのですよ。万が一王子が命を落としでもすれば、今、辛うじて魔力の均衡を保っているこの世界のバランスが崩れ、すべてが混沌に帰してしまうのですぞ？」
「そうだよ、ケイ！　ケイが心臓の中に持っている魔法炉だけが、人類唯一の希望なんだからね！」

ぽかーん。

圭一は彼らが何を言っているのか皆目理解できなかった。
王位継承者？　魔法炉？　いったいこれ何のＲＰＧ？
「ケイ……」
少女が腰のポーチからそっと黒い短剣を取り出した。柄は様々な光沢の宝石で凝った装飾が施されていたが、その漆黒の剣身はどこか禍々しい空気を纏っていた。
「こんな物、本当はケイには渡したくないんだけど……もし奴らに捕まったときはこれを使って」

「これを……何に使うって？」
「これを心臓に突き立てるんだよ！」
「し、心臓に⁉」
「そう、それでケイの魔力は完全に解放される。それで世界が救われるんだ！」
少女の目は真剣だった。
圭一は一刻も早くこの場から逃れたい気持ちでいっぱいになった。
「む⁉」
老紳士が眉を顰めるのと、圭一の体に強烈なＧがかかるのとは、ほぼ同時だった。
リムジンが派手にスピンをし、路肩のビルに突っ込む。
「私としたことが……抜かりました。奴らに先回りを許すとは……」
じんじんと痛む頭を押さえながら圭一が外を見ると、道路の真ん中に大きなクレーターのような穴が開いていた。どうやら向こうのビルの屋上から狙い撃ちをされたらしい。
「ケイ！　早く逃げて！　ここはボクと爺やでなんとか食い止める！　ケイは早く剣姫のところへ行って！」
「う、うん！」
訳がわからなかったが、とりあえずこの場から逃れることができるのは圭一にはありがたかった。リムジンを降り、猛ダッシュする圭一の背後から名状しがたい爆音と咆哮が迸って

いたが、後ろは絶対見ないことにした。
「あ！」
商店街を抜けた圭一が見つけたのは駅前の交番だった。圭一はすぐさまそこに駆け込んだ。
「お、おまわりさん！　大変なんです！　向こうのアーケードで僕、命を狙われて、それから大爆発がおきて、それからそれから……」
圭一はぜいぜいと息を切らしながら警官に訴えるが、警官は彼に背を向けたままマネキンのように動こうともしない。
「あの……おまわりさん？」
「お待ちしておりましたよ、魔王様！」
「ひっ!?」
突然警官の首だけがギギギと音を立てて180度回転し、同時に頬まで裂けた大口が露わになった。
「あああああ、この復活の時を何百年待ったことか！　さあ今世こそ、このわたくしめと血と恐怖と暴虐とによって全世界を統べましょうぞ！」
「わあああああ!?」
血走った目で詰め寄ってくる警官から、圭一はまた必死で逃げ出した。
交差点を駆け抜け、駅前広場を抜け、とにかく走って走って走りまくる。

だが街の様子が何かおかしい。
必死で走る圭一に向かって、見知らぬ通行人たちが次々と声をかけ、すがってくるのだ。
「おお、幸村殿！　ついに転生なされたか！　じいは嬉しゅうございますぞ！」
「ラスブーチン様ああ！　よくぞご無事で！」
「もっと、光を……！」
「日本の夜明けは近いぜよ！」
「僕と契約して魔法少女になってよ！」
「ええ!?　なに!?　なに!?　なんなの、一体!?」
押し寄せる大群衆に、圭一は遂にまったく身動きがとれなくなってしまった。
堪らず、叫ぶ。
「もう、やめてよー！　僕にはもう何がなんだか訳がわからないよーー!!」

がばっ。

ベッドから跳ね起きた圭一の額からぽたぽたと汗がこぼれ落ちる。
見るとパジャマは寝汗でぐっしょりになっていた。
そこはいつもと変わらぬ自分の部屋。そしていつもと変わらぬ自分のベッドだった。

「はあ、夢か……すごい悪夢だったな……僕、相当疲れてるのかな……あとアッチ系のアニメ観過ぎだな……ちょっと自重しよう……」

悪夢から解放された安堵感で、圭一はふうう〜〜と長い長いため息をついた。

カタン。

ベッドから何かが床に落ちた。見るとそれは。

夢に出てきた黒い短剣だった。

「あれ？　どうして、これが……」

圭一が呟いた時、部屋の外から聞き覚えのある、金属の軋むような耳障りで嫌な音がした。

おしまい